

教育のイメージ④ 就学に向けて！って？

理事長 片山喜章

どんな子どもにもそれぞれ持ち味があります。その子の持ち味を見つけ出して共感し、伸ばしてあげることが教育の役割だと誰もが考える一方で、就学前になると、学びの深さは別にして、授業中、一定の時間、座っていられるかどうか、気になるのが親心です。「園でのびのび過ごすのも良いけれど、学校に行って大丈夫なようにきちっと躰はしてほしい」と保護者の方からは、昔も今も変わらない要望をいただきます。私たちも「保育園出身の子どもは落ち着きがない・・・」と中傷されると憤りを感じます。授業中、先生の話は、うわのそらでも40分間、椅子に座って、まわりに迷惑をかけなければ、少しは安心するという保護者の願いにどこか“切なさ”を感じてしまいます。保育園で特訓するかしないかではなくて、別次元の教育課題なのですが・・・。

卒園間際になると、全員が30分くらい座ってワークをする園が法人内にはあります。これは就学対応というよりも、小学生になる期待を抱いてもらうためです。学校へ行ってからの“立ち歩き防止策”とはほぼ無関係だと思われれます。また学校関係者との懇談では「入学当初、お利口にしている子は秋くらいから散漫になることが多々あって、入学式によそ見をしたり足をブラブラさせたりしている子が、秋には落ち着いている場合がある」「4、5年生になると1年生の時とは大きく変わる子もいる」という話題で盛り上がりたりします。しかし一概に言えるものではなく、これもまた、子どもたちの健全な成長を願う本来の教育とは別の話のように思えます。

授業中の立ち歩き云々の問題は、保育の課題として扱わないで、その小学校の先生たちのそのときどきの課題として託し、お任せすることが望ましい「連携」だと思います。

4月から新制度として認定こども園制度がスタートします。学校教育との連続性や接続カリキュラム論議が急速にすすむ見込みです。「幼児教育の目的は？」「学童前期の教育内容を如何に？」学力の定義付けや深い問いかけがないまま「接続の形」だけが論じられるなら「ゆとり教育」の時と同様、犠牲になるのは、子どもたちであり、現場の先生たちだと思います。

「教えられて得た知識よりも知りたいと欲する探求心を」「知り得た知識の内容よりも自分自身の生き方や判断力に活かす体験を」と多くの人が人生経験のなかで実感しているのに、頭の堅い日本の教育界は、このような根本的な問いを横目にウエから実践のあり方を下ろしていく、それが、子どもたちの学習意欲を奪い、先生たちの創意を削いでいく、というのが私の弁です。

1つの机と椅子に1人の子ども、みんな教壇を向いている、これでは子どもどうしが教え合い伝え合うことは困難です。ですから、就学に向けてまず、小学校の先生たちが頻りに保育園や幼稚園を見学すれば・・・、6年生まで授業全体の大半を1つのテーブルに4人が座っておしゃべりできる環境にすれば・・・、子どもたちどうしが話し合い、教え合うことで生まれるエネルギーや吸収力の大きさにきっと驚かれるに違いないと確信しています。